

認定医更新展示発表 I

15年以上の継続的定期管理群の口腔健康状況について— 歯周疾患とう蝕有病状況 —

○松尾敏信、*川崎浩二

長崎市歯科医師会、*長崎大学大学院医歯薬学総合研究科健康予防科学講座

目的：小児歯科では子供達の口腔機能の育成と、生涯にわたる歯科保健についての管理の自立支援を行っている。今回長期にわたる管理群と同じ世代で新患として来院した子供達の母親との比較と通じ、管理の評価とそのあり方を検討したので報告する。

対象：15年以上継続管理し1年以上のブランクがない者（管理群）、初診から15年以上経過し1年以上のブランクがある者（ブランク群）と、同じ世代で新患として来院した子供達の母親（母親群）を対象とし、歯周疾患とう蝕の有病状況を比較検討した。

結果：管理群、ブランク群、母親群の DMFT-index はそれぞれ、2.1, 5.7, 12.1 であった。また CPI の 4mm 以上のポケットの割合、ならびに BOP の割合においても管理群が最も良好であった。

考察：今回の調査で、小児から15年以上の継続的管理が行われた群の口腔は対照群と比較してう蝕だけでなく歯周疾患の状態も良好で、その較差は大きかった。しかしながら小児の管理は養育者の歯科保健への関心によって決定され、また自己管理能力が完成するまでに時間がかかることも事実である。そのため長期継続管理を受ける者の数は少ない。小児期の歯科保健対策が各家庭に依存し、治療を中心とした現在の保健医療システムでは小児歯科の目標を達成することは困難である。歯科疾患は予防可能であり、責任のあるかかりつけ歯科医の推進、管理評価システムの確立、すべての子供達に対して科学的根拠のある地域でのフッ化物による公衆衛生施策が不可欠であると思われる。

認定医更新展示発表 II

学校健診後の受診行動に関する実態調査

○湖城秀久

湖城歯科クリニック（浦添市）

沖縄県における児童・生徒のう蝕罹患率は約90%で、全国平均と比べると約10%高い。そのうえ、未処置歯のある者の割合は約60%で、全国平均のそれより約20%高い。すなわち、本県の児童・生徒は、う蝕に罹患している者が多いにもかかわらず、そのう蝕を未処置のまま放置されているのが現状です。そこで、う蝕の処置を妨げている要因を探るため、2小学校の5・6年生391名、2中学校の2年生344名と2高等学校の2年生632名を対象に、調査用紙を用いて行った。

調査方法

調査項目としては、健診結果でのう蝕の有無や、むし歯の治療進行状態、中断や未受診の理由等に加え、セルフエスティームに関する事についても調査しており、う蝕の有無や治療との関わりについて検討を加えた。

結果

健診結果でむし歯がありましたかの問いに、小学生の65%中学生の67%、高校生の61%の児童・生徒にむし歯があり、そのうち、小学生の43%、中学生の27%、高校生の22%が、治療を完了している。

しかし、小学生の29%中学生の33%、高校生の50%が、歯科医院に受診しておらず、治療を中断している者も合わせると、小学生の45%、中学生の56%、高校生の73%が、むし歯を治療せず放置している。

その中断や未受診の理由を問うと、小学生と高校生では、今痛みがないから（小学生41%高校生40%）、部活動があるため（小学生24%・高校生26%）、治療に時間がかかるため（小学生15%・13%）の順に多く、中学生は部活動があるため（44%）、今痛みがないから（21%）、むし歯の治療がイヤ（16%）の順に多かった。

また、学校は楽しいですかの問いに、小生の50%、中学生の29%、高校生の24%がとてもそう思うと答えている。